



Title	関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第5弾 「わたしたちの地球、わたしたちの健康」 第3回：ヒトも動物も昆虫も！健康への取り組み
Author(s)	小笠原, 理恵
Citation	目で見えるWHO. 2023, 83, p. 30-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第5弾 「わたしたちの地球、わたしたちの健康」 第3回:ヒトも動物も昆虫も!健康への取り組み



大阪大学大学院医学系研究科
国際未来医療学講座/国際医療センター 特任講師

小笠原 理恵

米国で看護学を学んだ後、中国上海市の外資系クリニックでマネージャーを務める。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了、大阪大学ユネスコチェア運営室助教を経て、2022年より現職。

2022年8月4日(木)、関西グローバルヘルスの集いオンラインセミナー第5弾の最終回が開催されました。第5弾の締めくくりは、「ヒトも動物も昆虫も!健康への取り組み」と題して、地球上に生きとし生けるものへの愛とリスペクトにあふれたセミナーになりました。総合司会の戸田登美子さん(甲南女子大学)の挨拶から、安田直史さん(近畿大学)のファシリテーションで話題提供に進みました。今回の話題提供者は、国際獣疫事務局アジア太平洋地域事務所の釘田博文さんと、国立環境研究所生物多様性領域の五箇公一さんでした。

ワンヘルスの国際的な取り組み(釘田氏)

国際獣疫事務局(WOAH)はその前身が1924年にフランスで設立され、2003年にWorld Organization for

Animal Health という英語名も定められ、2022年からは現在のWOAHという略称が使われています。「透明性」、「国際基準」、「専門性」、「連帯」を4つの柱に、世界の動物の衛生および福祉の改善のための活動を行っています。近年、人の病原体の60%は人獣共通の感染力を持つこと、新興感染症の75%は人獣共通の感染症であること、そしてバイオテロに使われる恐れのある物質の80%は人獣共通病原体であることなどが明らかになってきました。人、動物、環境の相互関係の中で発生する感染症、食の安全等の問題に対応するためには、人の衛生(公衆衛生)、動物衛生、環境衛生(保全)の各分野の関係者が様々なレベルで連携・協力して取り組むOne Healthアプローチが必要です。国際的にはFAO、WHO、WOAH、UNEPの連携の下で、狂犬病の世界戦略(ZERO BY 30)や薬

剤耐性問題、野生動物の健康管理など、One Healthの考え方に基づく取り組みが行われています(図1)。専門家だけでなく、一般消費者も含めた広範囲な人びとにOne Healthの考え方を普及し、理解と活動への参画を進めることが重要です。

農薬・外来種・感染症…そして温暖化 グローバル化がもたらす昆虫類多様性の危機(五箇氏)

地球はそもそも生物多様性に富んだ生き物の宝庫です。地域ごとに進化した遺伝子・種・生態系が様々な生態系機能を生み、美しい水と空気を供給し、物質循環を支えて生物圏を維持してきました。それが人間による汚染、乱獲、生息地の破壊、外来種の侵入、気候変動・温暖化などによって、昆虫類にも絶滅の危機が迫っています。このまま昆虫の減少が続くと、50年で半減、100年後に全滅!とも言われています。昆虫類の減少要因には、気候変動、都市化や森林の減少などとともに、農薬使用を含む現代の農業のありかたが大きく関わっています(図2)。ある種の農薬は、欧米では使用規制が強化され始めているのに、日本では今も使い続けられています。農薬使用の主な原因は農業従事者人口の「高齢化」にあります。農薬使用以外にも、温暖化、国際海上輸送による外来種の侵入、人間による乱獲などが、生物多様性の劣化の原因として挙げられます。昆虫類を含む生物多様性の危機は人間存続の危機をも



図1 国際獣疫事務局におけるOne Healthの考え方に基づく取り組み

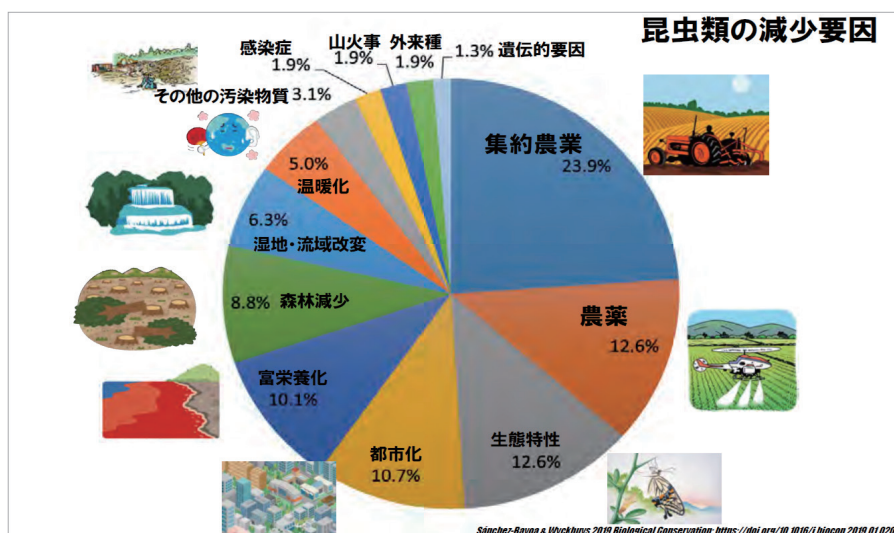


図2 昆虫類の減少要因

たらしめます。

今回の新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、「人間を減らせ！生態系を回復させよ！」というわれわれ人間に対する警告であり、ウイルスは自然からの使者ともいえます。生物多様性の破壊を減らし、自然共生社会を構築すること、すなわち昆虫を含む生物多様性の保全は、とりもなおさず人間社会持続のための安全保障なのです。

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、話題提供者のお二人からいくつもの名言が飛び出しました。このままだと100年後には昆虫が全滅する！というお話がありましたが、心配しなくてもその前に人間が減っている、という五箇さんのコメントにはハッとさせられました。釘田さんからは教育の重要性について、日本ではなかなか実現しないけれど、医学部生と獣医学部生と一緒に学ぶことの効果の高さが指摘されました。また、人間社会と野生・自然社会のゾーニングを見直して仕切り直すことの重要性は、お二人が共通して指摘されたことでした。私たち一人ひとりにできることとして、「足もとの自然から見直す」こと、そして「地産地消のライフスタイル」に近づけること、というアドバイスを頂き、改めて自分の身の回りを見直そうと思いました。

オンラインセミナー 第5弾全体をふりかえって

オンラインセミナー第5弾「わたしたちの地球、わたしたちの健康」は、2022年の世界保健デー（World Health Day）のテーマ「Our Planet, Our Health」を、そのまま引き継ぎました。世界保健デーを1日限りのお祭りイベントにせず、KGHの集いの視聴者の皆さんとともに、地球規模で、生きとし生けるものの環境や健康やいのちのことを学び、何が必要かを考え、そして行動してみるきっかけにしてみたいという思いで企画しました。また、グローバルヘルスとプラネタリーヘルスの繋が

りを考えていくことを一つの大きな目的にしました。これまで KGH の集いで取り上げてきたのは、グローバルヘルス、つまり私たち人間を対象とした医学または医療に関するテーマがほとんどでした。

第5弾のセミナーでは、医学・医療の枠を超え、野生動物や家畜動物、環境などの専門家をお招きしての話題提供と、そうした専門家とのパネルディスカッションを通して、プラネタリーヘルス領域に挑みましたが、これは私たち運営スタッフにとっても新たな挑戦でした。

第5弾セミナーは終了しましたが、グローバルヘルスとプラネタリーヘルスのつながりは、まだまだ曖昧模範としています。例えば、農業が私たち人間の健康な食生活に果たす役割は計り知れず、安定的な農作物の供給によって、より多くの人間が飢えることなく感染症に打ち克つ栄養を蓄えることができています。しかし日本では、高齢化した農業を支えるために使用される農薬によって、生態系に負の影響が出ていることが、五箇さんのお話の中で指摘されました。こうした二律背反の関係性をどう考えればいいのかは、とても難しい問題です。今後も私たちは、地球の健康と人間の健康の関連性を統合的にとらえるプラネタリーヘルスという発想に目を向け、グローバルヘルスとプラネタリーヘルスのつながりを模索し続けたいと思います。

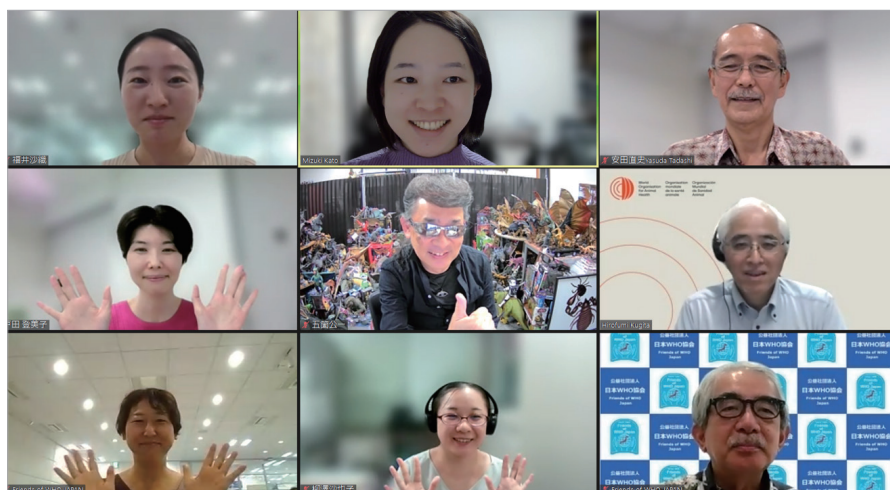


写真1 第3回の集合写真（中央が五箇氏、その右が釘田氏）